

## 濃縮度試験報告書

(試験方法及び条件については、一部を除き前回と同じであるため異なる部分のみを記載し、同じ内容については省略する。)

### Ⅱ-1 試験期間

昭和54年1月17日 ~ 昭和54年3月31日

### Ⅱ-2 試験方法及び条件

環保業第5号

薬発第615号 魚介類の体内における化学物質の濃縮度試験による  
49基局第392号

#### Ⅱ-2.1 濃縮度試験

##### Ⅱ-2.1.1 試験条件

(a) 水系環境調節装置 流水式

(揮発性化学物質用濃縮度試験装置を使用)

試験水槽

ガラス製 容量 100l

流量 1152l/日

原液：希釈水 = 2 ml/分 : 800 ml/分

(b) 試験魚

コイ 平均体重 30g

平均体長 11cm

(c) 水槽中の溶存酸素量

図-Ⅱ-11 及び Ⅱ-12 参照

(d) 水槽濃度

設定理由

精度よく定量できる濃度は約4 ppm (図-Ⅱ-3参照)であり、水分析時の前処理操作において200倍濃縮が可能なこと及び水分析時の回収率を85%、予備飼育により水槽濃度の低下率20%と見込み、低濃度区の水槽濃度を設定した。高濃度区についてはその10倍とした。

(計算式) 第2濃度区の水槽濃度は

$$\frac{4}{200 \times 0.85(1-0.3)} \div 0.03 \text{ ppm になる。}$$

設定値(単位 ppm W/V)

	供試物質	分散剤 HCO-40
第1濃度区	0.3	1.5
第2濃度区	0.03	0.15

実測値

表-1 濃縮倍率を求めるための平均濃度(単位 ppm W/V)

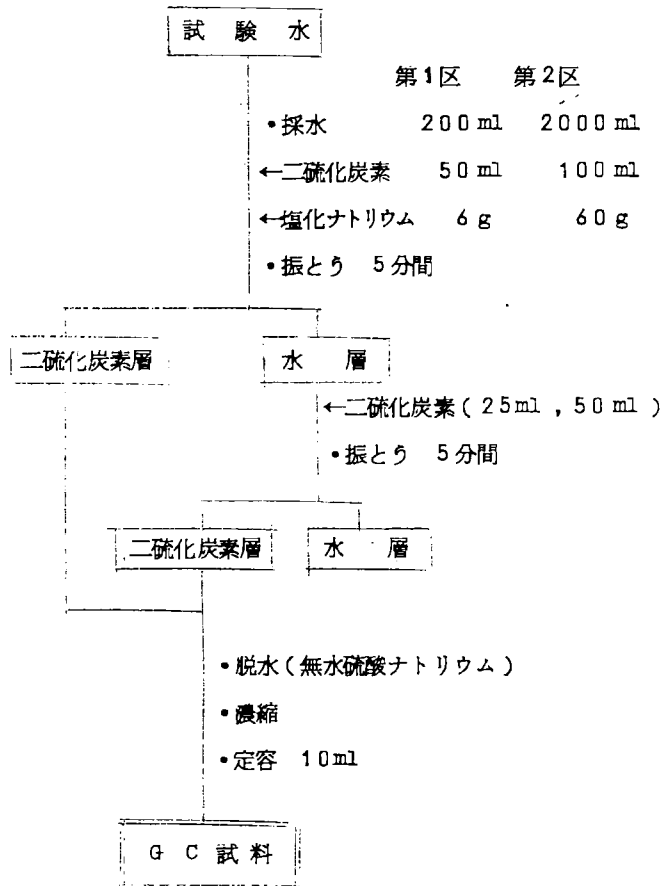
	2 W	4 W	6 W	8 W
第1濃度区	0.252	0.283	0.281	0.277
第2濃度区	0.0283	0.0276	0.0285	0.0274

## Ⅱ - 2.1.2 分析条件

### (a) 分析試料の前処理

魚体 前回と同手法

試験水



## Ⅱ - 3 試験結果

### Ⅱ - 3.1 供試魚の状態

外観観察結果：正常

### Ⅱ - 3.2 濃縮度試験の結果

表 - 2 供試物質の濃縮倍率

	2 W	4 W	6 W	8 W
第1濃度区	7 1.7 5 6.0	5 8.2 7 5.6	4 5.4 4 1.6	8 7.2 5 7.8
第2濃度区	( 5 0 ) ( 2 0 )	( 1 8 ) 1 1 2	( 2 2 ) ( 2 8 )	9 8.3 ( 2 1 )

参考値：( )で表示

なお試験結果の表示について濃縮倍率と定量精度の関係は次の通りである。

	魚体中濃度 (ppm)	濃 縮 倍 率	計 算 方 法 (ppm)
精度よく定量 できる範囲	1.44 以上	第1区 5.2 以上 第2区 5.3 以上	$\frac{A}{\frac{C}{100} \times \frac{D}{E \times F}}$
参考値の範囲	1.44 ~ 0.11	第1区 5.2 ~ 0.4 第2区 5.3 ~ 4	
検出限界引下 とする範囲	0.11以下	第1区 0.4 以下 第2区 4 以下	$\frac{B}{\frac{C}{100} \times \frac{D}{E \times F}}$

A. 精度よく定量できる濃度 = 4 ppm (図 - Ⅱ - 3 参照)

B. 検出限界の濃度  $(\frac{S}{N} = 2) = 0.3 \text{ ppm}$  (図 - Ⅱ - 3 参照)

C. 回 収 率 : 92%

E. 最終液量 : 10 ml

D. 魚 体 重 : 30 g

F. 希釈倍率 : 1

#### Ⅱ－４ 備 考

クロロトルエン（K-299）についてそれぞれ濃縮度試験を  
2回実施した。

第1回は、試験水槽の水面に簡単な浮ぶたをして供試物質  
の揮散を防ぐと同時に希釈水量を800ml/minにして濃度保  
持を試みた。

第2回は揮散性化学物質用濃縮度試験装置を使用した。

第1回及び第2回の試験から設定水槽濃度に対し第1回の場  
合50～65%が保持されたが、第2回の場合約90%保持され  
揮散性化学物質用濃縮度試験装置の効果が十分認められた。

以 上